近世日本金融市場の構造：Relationship Finance と Arm's Length Finance

高槻泰郎（神戸大学）

要旨

江戸時代初期、大坂で開業した加島屋は、①堂島米市場と②大名金融市場の二つで、江戸時代日本を代表する豪商へと駆け上がった。2011 年以降、発見が相次いだ加島屋の経営史料を活用し、本報告では、豪商・加島屋について、その成り立ちと変遷を概観した上で、加島屋の目から見た近世日本金融市場（特に上記①と②）の特徴について考察し、金融研究者との対話を試みる。

①堂島米市場は、Arm's Length Finance の場として位置づけられる。米切手という 1 枚当たり 10 石の米との交換を約束した証券（発行者は各大名）が活発に取引された証券取引市場であった堂島米市場において、加島屋は米切手トレーダーとして、堂島米市場の頭取としてこれに関与している。②大名金融市場は Relationship Finance の場であり、加島屋は萩藩・中津藩・津和野藩などの御用達として、深く藩財政に切り込む形で資金融資を行っていた。

近世期最大の資金需要者であった大名は、上記①と②のいずれか一方、ということではなく、①と②を組み合わせる形で資金調達を行っていた。短期的な資金繰り、あるいは運転資本の確保において①を、恒常的な定額支出（江戸での支出、参勤交代費用など）や臨時支出を②で賄っていたと考えられる。